

学生フォーラム

# 「感動する大学を作るために」

感動の大学を目指して ～ Yes, We Can Do! ～

## 学生フォーラムの開催にあたり

法学部教授 **横山千晶**

2008年で慶應義塾大学は創立150年を迎えます。この150年という長い年月、これは慶應の歴史のみならず日本の大学の歴史そのものでもあったかと思います。おそらくいろいろなことが変わったでしょう。大学というものがどういうところかという定義も変わっていったと思います。皆さん方にとって大学とはどんなところですか。勉強する場所でしょうか。それとも、人と会ってクラブ、あるいはサークル、といった活動に勤しむところでしょうか。コンピューターを使ったり図書館を使ったりする建物、あるいは施設でしょうか。いろいろな定義があるかと思います。しかし、その中でやはり一番大切なことは、大学は人が創っていく場所であるということではないでしょうか。つまり、どういう形であれこの場所をコアにして、知識、あるいは概念が生み出され、人を伝って外へと出ていく。その中心になるのが、おそらく大学なのでしょう。つまり私たちは、どういった知識をまず伝えていったらよいのか、そしてどのようにしてそれを伝えていったらよいのか、常に考えていかなければいけません。つまり、大学は常に開かれている場所であるということです。

2002年に教養研究センターが開いた理由もそこにあります。慶應義塾というひとつの学び舎をコアにして、どんな知識をつくっていったらよいのか、そしてどのようなメソッドを使ってそれを外に開いていったらよいのか、その方法を皆さんと一緒に考える場所がこの教養研究センターです。

もちろんこの教養研究センターには、さまざまな人たちがかかわっています。学生、職員、そして教員です。そういった中から、開かれゆくキャンパスを考える上では、やはりコア 中心 からの声が必要だと思います。今回その声をあげてくださったのが学生さんたち。そして教養研究センターもその声に応じて支援する形になったわけです。

今回の学生フォーラムはまさに学生が企画した最初のフォーラムです。そして、それは単に学生が大学に対して要求をする場ではなく、学生自身が自分の今いる立場をこの慶應の中で考え、そして自分たちが見つけ出したアイデンティティをより1人でも多くのほかの学生と共有するという場です。

そして、そういう形で培われてきた学生さんたちのアイデンティティが、やがては外へ広がっていき、2008年という創立150年の年を越えて、新たな大学の、新たな日本の、新たな世界の将来、その夢へとつながっていくのです。そのことを心から願ってやみません。

The Tribera Arts

## 講演：あらためて「大学」を考える

羽田 功（経済学部教授）

大学とはそもそも何をするとところか、これは実は私が考えたタイトルではなくて、教養教育研究会の学生さんの方から与えられた課題です。久方ぶりにレポートを書かされるような、学生時代の気分を味わいました。まず、大学とはということで、最初に思い浮かぶのは学びの場であるということです。とすると、大学とは何を学ぶ場所なのでしょくか。この点について、二つの比喩的な話を続けてお話ししていきたいと思ひます。

まず一つは洞窟の比喩です。プラトンの『国家』第七巻に、教育について書かれている部分があり、そこに紹介されている話です。それによると、洞窟の中に強制的に閉じ込められている人々がいる。彼らはみな洞窟の奥の壁に向かって、そこに映る影ばかりをみて暮らしている。ところが、ある日、中のひとりが洞窟の入口へと向かい、外の世界を目にし、ついには究極の真理である太陽の光までを見てしまった。プラトンは、その者こそが再び洞窟に戻り、自分が見たものを皆に伝えなければならないと言っている。それこそが教育なのだというわけです。

二つ目はこのプラトンの比喩の現代版、というか未来版です。人類が地球を捨てざるを得ない状況になり、巨大な宇宙船に乗って別の惑星に移住していきます。すべてが自給自足できる宇宙船の中で彼らは長い長い航海を経て、新しい世界に向っていかねければなりません。やがて宇宙船の中での生活が耐え難いものになっていき、不平・不満がたまっていきます。そこで指導者たちは、宇宙船こそが自分たちが生きている唯一の世界であり、ほかに世界はないと皆に教えます。また、そのように歴史を書き換え、宗教を生み出したりもします。ところがこの宇宙船には実は一ヶ所だけ窓のある部屋がありました。その窓からは外の宇宙の景色を見ることができます。もし、たまたま誰かがその部屋に入ったらどうなるでしょう。窓の外にいったい何を見るでしょう。そのとき、何を感じ、何を知るでしょうか。

これは政治思想史の研究者チャールズ・ダグラス・ラミスが1982年に出した『影の学問、窓の学問』という本の中のエピソードなのですが、プラトンの話にせよ、ダグラス・ラミスの話にせよ、考えるべき点は、一見恵まれた生活や教育環境にある私たちが実際にはいろいろなことに対して目が見えなくなっているのではないか、そうしたものを知らずにたくさん抱え込んでしまっているのではないか、ということです。これは教育本来の目的



からすれば逆行していることに違ひない。もしかしたら今現在もこの状況というのはそんなに大きく変わっていないのかもしれない。そこで、あらためて大学や教育を考えてみると、大学、教育には窓としての機能がなければならぬと思ひます。

おそらく三つの窓が考えられます。一つは、根本に目を向ける、あるいは根本を問うていくための窓です。自分とは何かを問い、その問いを通して他者とは何か、あるいはそういう集合体である世界とは何かといったことを考えていく。これは過去に目を向けることにも当然つながっていく、とても大事なことだと思ひます。

二つ目は現在に向けられた窓です。自分、他者、世界の根源を知ること、今度は現在ある自分のこと、他者のこと、世界のことを意識していく。つまり、自分が今どのように生きればよいのか、この先どうやって生きていけばよいのか。これは自己認識の問題です。そのとき、たとえば自分が生きる「場」を考えようとしても、おそらく自分の経験だけでは不十分でしょう。これだけ世界が広くなり、同時に情報環境としては狭くなっている中で、自分自身を認識するということは昔よりも間違いなく難しくなっています。それにそもそも自分自身を知るということは自分のことだけを知ることではないと思ひます。社会や世界にあってさまざまな関係の中で自分が生きている、その中で自分がどこにいるのかを知ること。そのための窓が必要であり、それこそが現在に向けられた窓ではないでしょうか。この窓を自己のうちに作り出すことは大学で勉強する非常に大切な目的の1つです。

さて、三つ目の窓です。自分の立っている場所も分かり、周りの状況も分かった上で、今度は自分がどこに向って行くのか。あるいは社会や世界がどこに向って行くべ

## 開かれゆくキャンパス 3 「学生フォーラム『感動する大学を作るために』」

きなのか。そうしたことを考え、知るための未来に向けた窓を作っていかなければなりません。

そう考えると、何よりも大学はそれ自体がこのような窓でなければなりません。そして、大学に集う私たちは、そこで三つの窓について先人たちから学びつつ、自分の中にもその窓を作り上げていかなければならない。それこそが大学の役割であり、また大学で学ぶことの意義・重要性であろうと思います。

教養教育センターで三年ほど前に公開講座をやったことがあります。「教養とは何か」というタイトルで、内外から多様な講師陣をお迎えしました。その中のひとり、慶應義塾大学出版会の社長でもある作家の坂上弘さんが、教養に関心を持ち、教養を身につけていこうという積極的な活動すること自体が教養なんだと言われました。「教養する」ということです。私の話に関連させれば、上に挙げた三つの窓をどういう形で自分の中に意識化し、これを積極的に作り上げていくのが坂上さんの言う「教養する」ことにあたるのだと思います。

それでは、大学がそういった窓であるためにはどうすればいいのか。一つは、大学が空洞化していないかどうかをたえず問いかけていかなければいけない。そのためには大学はつねに一定以上の活動性と柔軟性を保持していかなければいけません。大学が閉じた存在となることへの危機感を私たちは共有する必要があります。というも、大学に限らず、近代は教育の機会を大きく広げましたが、同時に子供たちを学校に閉じ込める契機をも提供したのです。このことも真摯に問い直さなければなりません。

その上で、ただ閉じることへの危機感を持つだけでなく、これからはむしろ積極的に大学を開いていくための努力こそがいよいよ大切になっていこうと思います。既存のキャンパスを再構成・再構築していくということもあるでしょうし、さまざまな場を新しいキャンパスに変えていくということもあるでしょう。大学を構成するメンバーやカリキュラムの多様化も含めて、いろいろな考え方が可能なはずです。これは大学が新しい顔を持つ、新しい窓の機能を果たすことでもあります。

最後にもう一度「教養する」ことに戻ります。大学を構成するすべてのメンバーの活動が「教養する」ことと同じ意味であるような場、そういった場として大学が生まれ変わっていけるのであれば、そこには新しい可能性、未来というものが開けてくるのではないのでしょうか。たとえば、現在、安西塾長の下で、慶應義塾は感動教育の実現・実践を進めつつあります。これは今日のフォーラムの副題にある「Yes, We Can Do!」のDo、CAN DOにつながるべきものだと思います。教育の本源が「引き出す・導き出す」ことにあるのだとすれば、「教養する(DO)」ことは教育本来の役割に立ち戻ることでもあるでしょう。そして、それらが実際に確かな形でつながったとき、そこに新たな大学像ができていくのだと信じています。

私たち(WE)が開かれた場としての大学をつくっていくことの出発点として、学生さんたちが主体的にこのような場を作ってくれたということにはたいへん大きな意義があると思っております。



# 学生発表：制度班

白石秀彰(法2)、佐藤晴紀(商2)、萩原里江(文1)、牧原祐亮(政2)

(カッコ内は所属学部・学年)

## I. はじめに

私たち制度班のプレゼンテーションでは、セメスター制度と授業評価の2つを具体的に取り上げます。そして、私たちが考える大学の理想像や学生の声を授業やカリキュラムに反映するための方法提案を通じて、学生が大学に参画できる体制作りの端緒としたいと考えます。

## II. セメスター制度の導入にあたって

まずセメスター制度を取り上げたいと思います。セメスター制度とは、授業が半期で完結し、履修申告、成績評価も半期ごとに行い、休学も半期単位で認めるものです。

日吉キャンパスではセメスター制度では一部でしか実施されていません。一方、SFC(湘南藤沢キャンパス)では、完全なセメスター制度が導入されていますし、その他の私立大学、国立大学、海外の大学の多くはセメスター制度を導入しています。

では、なぜセメスター制度が国際的に一般化されてきているのでしょうか。

セメスター制度を導入した学校を調査したところ、その多くは、履修の自由度が広がる、短期での目標が明確になる、半期ごとに成果が確認でき授業への集中度が増す、不合格科目のリカバリーが早期にできる、留学を促進するといった多くのメリットを感じています。これらのメリットが導入の理由となるようです。

それでは、ここでシラバスを見てください。学生は、この数百の科目群から履修登録する授業を選びます。しかし、どの程度の前提知識が必要となるのか、科目がどのように関連し合っているのかという情報は乏しく、同じ系統に属すると思われる科目が全く別の場所に記載されており、学生には非常に使いづらいものとなっています。

そこで、日吉キャンパスではセメスター制度を機械的に導入するのではなく、科目を自然科学・人文科学・社会科学、細かくは法律・政治系、経済・経営系、哲学・思想系といった系統に分類し、さらにレベルごとにクラスを設置します。そして、成績評価については統一的に、学問的な到達度を測ることを意識して行います。このようなカリキュラム編成にはいかがでしょうか。

そして、複数の系統でスタンダード・レベルまで修了することを求めることで、ただ楽に卒業しようとする学生を減らすことができると思います。また、学生は主専攻以外の学問も、これまで以上に学ぶことができるよう

になります。

## III. 授業評価について

授業評価の質問形式やフィードバック方法は大学や学部によってさまざまです。日吉キャンパスで行われている授業評価は法学部で任意の教員が行っているだけで、2004年の授業評価をまとめた冊子には25人の教員による45科目分の評価しか記載されていませんでした。これは、国内外の他大学と比較すると小規模なものと言えます。

こうした授業評価が近年になって広まったのは、授業評価が教員・学生双方にメリットがあると認識されるようになってきたからです。学生は、シラバスだけでなく、同じ学生という視点からみた評価が手に入ることで、自分の履修選択をよりたしかなものにすることができます。また教員も、学生のニーズをより正確に把握することができます。授業評価は学生および教員の方々にとって有用な情報を提供する仕組みであると同時に、学生の視点から慶應義塾の教育に貢献するたしかな方法なのです。

私たちは、学事センター内に授業評価を行う専門機関が設置され、統一的に管理された全学部・全授業における授業評価が実施されることを強く望みます。

## IV. 結論

このように私たちは制度面から学生が慶應義塾に貢献する仕組みを考えてきたわけです。

学生が、授業を「選択」してから、実際に授業を受けてそれを授業「評価」という形で教員にフィードバックすることで、授業が「改善」されていく。これが私たちの考える授業をよりよくしていくためのモデルです。これを有機的に機能させるためには、教職員だけでなく学生も自覚と責任感を持って思考し、発言することが求められることは言うまでもありません。

今回、私たちはセメスター制度と授業評価の導入について提案を行いました。しかし、私たちの目指すものももっと先にあるのです。すなわち、このモデルを定着させ、今回のようなフォーラムを拡大し、学生が大学教育に積極的に関わっていく体制を共に創りあげたい。そう思うのです。このフォーラムがその一歩になればこれに勝る喜びはありません。

## 学生発表：インフラ班

角倉英充(文2)、赤井俊文(政1)、原祐貴子(文1)  
萬崎智美(文1)、向美沙(商1)

(カッコ内は所属学部・学年)

私たちインフラ班は日吉のメディアセンターについて取り上げます。大学にはさまざまなインフラストラクチャーがありますが、とりわけメディアセンターはリサーチの場として、学生にとって最も身近な存在であると考えます。

しかし、メディアセンターでは実際に何が行われているのか、と聞かれるとよく知らないというのが現状ではないでしょうか。そこで私たちはメディアセンターについての調査を行いました。

### I. 日吉のメディアセンターはどういうところか

調査結果から、日吉メディアセンターは情報源としてすばらしい機能をもっているということがわかりました。まず、蔵書の充実が挙げられます。蔵書の購入予算は私立大学のなかでも際立っています。これだけの本を、一つの図書館に揃えているところはまずありません。また、慶應義塾大学に探している資料がなかった場合にはILLというシステムを使うことができます。これは他大学と提携して資料を共有するためのもので、このシステムを利用すれば慶應義塾大学の学生が早稲田大学などの他大学から本や論文を取り寄せることができるのです。この他にはデジタル資料やそのデータベースも充実しています。さらに、司書の優秀さがあげられます。

このように、日吉メディアセンターは情報源としてすばらしい機能を備えていることがわかりました。しかし、学生をサポートする体制の面からみた場合はどうでしょうか。私たちは次の三点が重要だと考えました。

### II. 改善点 理想の図書館を目指して

#### 1. 利用時間

学生が主体的に学ぼうとしたときに、メディアセンターが開館しているか否かはとても重要です。しかし、他キャンパスや他大学と比較してみると、日吉メディアセンターの開館時間は短いということがわかりました。

この件についてメディアセンターに伺ったところ、利用時間を拡大することは人件費、光熱費、来館者数などの面から見て難しいことがわかりました。

確かにこうした経営面での理由は理解できますが、大学が担う本来の役割を考えた場合には、リサーチを行う貴重な場としてメディアセンターは常に開かれていることが重要だと考えます。

#### 2. パソコン(ネット環境)ツール

メディアセンターが開いていたとしても、豊富な蔵書とデジタル資料を利用する情報検索のツール、おもにパソコンが十分に備えられていなければ、利用価値は半減してしまいます。ですから、こうしたツールの増設、利用環境の向上が求められると思います。

現に日吉キャンパスでは学生の数に比べてパソコンなどの機器が足りていないと思います。また、設置されていたとしても、不便な場所にあるというのが実情です。休憩時間や昼休みで、パソコンを快適に使える環境が日吉にはないのです。

### III. 情報リテラシー教育の必要性

最後に情報リテラシーについて取り上げます。前述の課題が解決されて学生に対して十分なリサーチ環境があたえられたとしても、その環境を活かすことができなければ意味がありません。日吉キャンパスは1、2年生が学ぶキャンパスですから、まずはリサーチの方法論、つまり情報リテラシーを身につける必要があります。

この情報リテラシーに関連する講義について調べましたが、日吉キャンパスでは法学部と理工学部のなかの四つの授業内で行われたに過ぎません。またメディアセンターでは、このような状況を改善しようと全学部に対して情報リテラシー教育を導入しようと働きかけていることがわかりました。

### IV. 結論

これまで、メディアセンターの改善すべきところとして、利用時間、ツールや環境、情報リテラシーについて取り上げてきました。

今後、これらの課題が解決され理想的な体制が整ったとしても学生がメディアセンターに関心を持ち続け、働きかける努力が求められていることはいうまでもありません。メディアセンターと学生が歩み寄ることで、アカデミックな学生生活を支えるためのインフラがこれまでに以上に機能すると考えています。

## 学生発表：教育班

南公人(商2)、北浦紗絵里(文2)、野村聡(政3)、鳥居夏帆(経1)  
堀江康成(文1)、佐竹和夫(経3)  
(カッコ内は所属学部・学年)

私たち教育班は外国語教育を取り上げます。外国語教育をテーマに選んだ理由は三点あります。第一に全学部で共通した科目であることが挙げられます。次に、必修科目であること。そして専門の授業を除いた場合に大きな学習の割合を占めている科目であるからです。このような特徴を持つ外国語教育を改善することができれば、大学教育の向上に貢献することができると考えました。

### I. 外国語教育の意義

なぜ、私たちは大学で外国語を学習するのでしょうか。大学以外にも語学を学べる場所は多くあります。それにもかかわらず、外国語を大学で学ぶことには、ただ会話ができるようになるだけではなく、外国語でその国や地域の文化を学び、理解することが重要となるからだと考えました。

この外国語教育の意義に基づいて外国語科目を選択する過程を考えますと、まずはじめに国や地域の文化を学ぶコンテンツ授業を選択し、それに基づき語種を選択し、コンテンツ授業の理解の助けとなる外国語の授業を選択できるようになることが理想的です。

### II. 外国語教育の現状

しかしながら、現状はどうでしょうか。まず私たち学生は何語を学ぶのか、つまり語種を選択しなければなりません。日吉キャンパスでは入学手続きの際に語種を選択します。次に外国語の授業を選択します。そして、ガイダンスを聞いたうえでコンテンツ授業を選択します。このような現状と理想的プロセスを比較しますと、次のようなことがわかってきます。

まず、語種・外国語の授業を選択する際に、ガイダンスが実施されないことがあげられます。学生は、シラバスなどの資料をたよりに授業を選択している現状です。そのため、履修後に自分の目的・レベルに違いを感じることが少なくないようです。また、コンテンツ授業を選択する段階が最後になるため、外国語授業と連動した学習が難しくなります。

### III. 外国語教育の向上のために

この現状を改善するためには、どのようなことを行っていけばいいのでしょうか。まず、語種選択前にコンテンツ授業のガイダンスを行うとことを提案します。

これは、外国語授業とコンテンツ授業を連動させることが外国語学習に対するモチベーションの維持につながると考えるからです。

また、実際に授業の全体像が見えるのは初回授業に案内される授業方針の説明のときのみですから、語種・外国語授業に関するガイダンスも必要であると考えます。

これらの条件を満たすためには、外国語教育のガイダンスをコンテンツ授業と外国語授業を関連させたウェブサイトで行うことが考えられます。時間や場所に関係なく、必要な量の情報だけ学生がウェブサイトから入手できる環境を作ることです。これは、学生の多様なレベルや趣向に個別対応できるという利点があります。ウェブサイトの内容は、外国語授業やコンテンツ授業へのリンク、コンテンツ授業と外国語授業を関連させたガイダンスなどが考えられます。

ですが、こうしたウェブサイトを検討する際に新たな問題点が浮かんできます。それは、学びたい語種が学部に設置されておらず、履修することができないということケースに対応できないことです。また、自分のレベルや目的にあったクラスが所属学部には存在しないことが考えられます。

これらの問題に対する解決策として、まず考えられることは、各学部で学生の希望を調査し、現状の設置授業の見直しを図ることです。また、他学部の外国語授業の履修を認める、もしくはその機会を増やすことがあげられます。現在、こうした試みについては外国語教育研究センターにて先進的に取り組まれていることが調査をした結果わかりました。

また、大学に求めるばかりではなく、改善に向けて学生から学びたい語種・レベル・目的について大学側にフィードバックすることが求められます。そして大学には、学部を超えた情報交換が求められます。こうした努力により教授法や運営のノウハウを相互に活かすことができるのではないのでしょうか。

### IV. 結論

外国語教育は、国や地域の文化を学ぶために必要です。そのための理想的な環境を作るためには、現状を見据えた上で授業やガイダンス内容、実施方法の見直し、学生と大学、そして学部間の協力体制の強化を図っていくことが求められます。

## 教養教育研究会の発表を聴いて

西村太良（常任理事）

まず大学1、2年生にとっては大学の情報を集めることでさえ苦労されたと思いますが、よく調べられておりどれも問題の本質を指摘されていたと思います。また、発表内容はどれも私たちが大学のこれからを考えるうえで参考になるものばかりでした。感謝しています。それでは、発表内容について感想を述べさせていただきます。

### 制度班：セメスター制度について

私たちもセメスター制を導入する過程で各方面にご意見をうかがいました。その意見のひとつには全学的に同時に運用するのが大切だ、という指摘がありました。つまり例外を設けるとセメスター制が十分に機能しなくなるのです。セメスター制度を導入した際には秋学期から新たに学生が入ってくるわけですから、一年単位で組み立てられている授業の場合はスケジュールと内容を再構成しなくてはなりません。現状では通年半期制で、表面上は春期、秋期に分かれていますが、連続して履修しなくてはいけない科目も多いのです。今後の方向性としてはセメスター制へ完全移行できるように検討を進めています。

### 制度班：授業評価について

今年度の大学基準協会による外部評価のなかでも授業評価については、あまり実行されていない、という指摘がありました。これについては他キャンパスや他大学の例を参考にして大学全体で検討していきます。

また、各大学の事例紹介をしていただきましたが、大学、学部の方でも他大学の授業評価について、集計方法や時期、管理方法、結果公開などの状況を調べています。

### インフラ班：メディアセンターについて

開館時間は24時間、理想を言えば365日開いている状態が望ましいということは、どなたも考えると思います。ただし、図書館の機能を考えてみた場合には、サービスの種類により24時間必要なものとそうでないものがあります。ですから予算面も含めて何をどのように運用する必要があるのかは検討をしなくてはなりません。たとえば矢上キャンパスでは、出入りについては学生たちで管理し、一部のスペースが24時間開放されているようです。メディアセンターの使い方は各キャンパスによって異なりますので、日吉についても検討をしていきたいと思っています。

### インフラ班：情報リテラシーについて

情報リテラシーについては、基礎情報処理といった科目が各学部で準備されています。そして機器については情報処理教育室が第7校舎にあり、ここでも情報リテラシーを身につけることができる授業が行われています。この他にメディアセンターでは、情報リテラシーに関する冊子を用意し、春に講習会を行っているようです。

現在は、このような機会を設けていますが、いくつかの課題があります。ひとつは、学生全員にこうした機会を知っていただくための努力が足りないことです。また、習得レベル別の授業が十分に展開できていないことです。これらについては、サポート体制を設けて解決していく必要がありますので、情報処理教育室やメディアセンターの方々と検討をしています。

### 教育班：外国語教育について

外国語教育は、ご指摘にありましたが必要な語種の授業内容にいつでもアクセスし、学べるのが理想的です。ただし、それを実現するには解決をしなければならない問題がいくつかあります。ひとつは、語種や授業の選択、カリキュラムの決定といったことがらに時期的なずれがあることです。たとえば入学手続きをしたときにはすでに次年度のカリキュラムが決定しているのです。ですから、カリキュラムをできるだけ融通が利くように組み立てることが求められます。要望に対応できる態勢作りにはこの他にも検討しなければいけないことは多くあります。

また、現在は履修案内やシラバスがウェブで見えるようになっていますので、授業やガイダンス面についてもウェブを活用した展開は可能だと思います。これらについては、大学としても入学以前から情報を入手しておけばよいと思っています。今後は学外の人でも履修案内やシラバスを閲覧できるような仕組みを導入することが求められます。また、これらだけではなく学生の意見や評価についても情報を掲載することができれば良いと思っています。

本日はお話しいただいた内容は的を得ているものばかりでした。そして、なかには私たちが検討中のものもあり、大学についてお互いに共通の認識を持っているということを実感しました。今後、これらを推進していくうえで、積極的に学生の皆さんのご意見をうかがえればよいと思っています。本日はありがとうございました。

## 講演：「150年目の慶應義塾と学生」

安西祐一郎（塾長）

本日はお招きいただき、ありがとうございます。

「大学とは何か」ということについて、これまで私もずいぶんと考えてきました。現在の大学の制度は近代の産物であるわけですが、慶應義塾について言えば、むしろ慶應義塾が近代を創り出していった。そのことは非常に大きな価値のあることで、慶應義塾はその誇るべき歴史をもった学塾であります。

いずれにしても、近代の流れの中であらためて大学が問われている。その大学の問われ方の根本は、羽田さんが言われたように、近代の閉鎖性というのでしょうか、大学もまた閉鎖的なシステムになってきた、ということにあるのではないかと思います。

大学はやはり開かれた学校になっていなければならない。まだ学生の皆さんにはあまり伝わっていないと思いますが、慶應義塾創立150年記念事業が始まりました。その記念事業の1つの骨子は、慶應義塾を「開かれた学塾」にしていきたいということです。「開かれた学塾」というのは、精神的な面もありますけれども、制度的な面、構造的な面で開かれた学塾になる、ということでもあります。今あるキャンパスの中だけに慶應の教育を限るべきなのかどうか、ということから今いろいろと考えています。

今回お話すテーマは「150年目の慶應義塾と学生」ということですが、ここへ入ってきてすぐに思い出したのは、やはり福澤先生以来の伝統である「半学半教」という言葉です。もともと福澤塾では、学生であるか教員であるかというのは相対的なものであって、学生がいろいろと勉強をして、余裕ができてきたら後輩に教えるというのが普通だった時代がありました。慶應義塾も大きくなり、分野によりますけれども、教師と学生のコミュニケーションが薄くなってきたように思います。こういった形での学生フォーラムは初めてだということですが、教養教育研究会の学生の皆さんが、より活発な教師と学生のコミュニケーションを目指しているいろいろな形で活動していただければありがたいと思います。

慶應義塾創立150年の記念の年が2008年にやってきます。では、その後の時代はどうなるのか。福澤諭吉先生の頃との違いで一番大きいものは、国内的には、やはり人口が減っていくということです。

国際的には、教養教育研究会の皆さんが生まれるころに存在していたアメリカとソビエトの冷戦構造から大きく変わって、現在はアジア諸国、ロシア、アメリカ、EU、いろいろな国々

がそれぞれ覇権を争って、いろいろな形で関係を作っている、そういう時代になっています。そうした非常に多様化した複雑な国際社会になっているわけです。そういう中で、これからの時代がどうなっていくかということ、国や民族、文化、宗教など、さまざまな軋轢が出てくる。あるいは国内でも、地域間格差や世代間の軋轢など、さまざまな軋轢が顕在化してくると思います。これからの時代には、それらの軋轢を越え、お互いの利害を調整しながら新しい社会、新しい組織、新しい仕組みを創っていく、そういう力が求められていくと思います。

また、これからの時代は、独立した人間がお互いに協力する心を持って新しい社会、組織、コミュニティーを創り出していく、そういう力が絶対に求められていきます。教養教育研究会もそうですが、最近では、例えばNPOなど、新しい組織を作って新しい活動をしていこうという動きがいろいろなところから出てきています。それは非常に大事な動きだと思います。慶應義塾がその先頭に立って「協力して生きる力」を磨くための教育を提供していくということが非常に大事だと思っております。

最近のいろいろな事件を見ると、皆それぞれが穴ぼこに入ったような暮らしをするようになってきています。そういった状況を越えてお互いに協力する。それにはやはりコミュニケーションが非常に大事になります。

コミュニケーションは、表面的に何か話しても通じるものではない。結局のところ、それぞれの人間が何かの感動的な体験を得たという経験が非常に重要な効果を及ぼします。そうして考えてみると、よく使われる言葉ですが、感動というのが極めて大事なことなのではないかと思います。慶應義塾こそが、150年を期してもっともっと感動の体験ができるような場を創り出していくべきではないか、学生の皆さんにそういう体験ができる可能性のある場をより多く提供していくべきではないかと思っています。

ただ、感動は与えるものではない。今日のテーマとして「Yes, We Can Do!」と言っていますが全くその通りで、これが感動ですよ、と与えられるものではない。やはり自分で感動しなければ感動ではないわけです。その経験を得るかどうかは、それぞれ学生一人一人に任されています。その可能性の場を提供することが大学の役割であって、それがこれからの大学、学校の大きな役割になっていくと思っています。それは別に慶應義塾に限ることはありません。

今、日本の教育が曲がり角にあるといわれる中で、慶應義塾こそが150年の歴史の重みを背負って、今お話ししたような教育のあり方というものを社会に提示していきたい。それが慶應義塾創立150年記念事業の一番のバックボーンです。

私は、福澤先生が今の時代に生きておられたら何をなさろうかと、いつも考えています。そう考えますと今お話ししたようになると思いますし、ぜひ学生の皆さんが自分の日々の時間を前向きにとらえて、そしていろいろな人たちとのコミュニケーションを持って、いろいろな人たちとの出会いの中で感動の体験を得てほしいと思います。そしてそれを糧にし、血肉にして、慶應義塾の卒業生としての誇りをもって、お互いに協力し、利害を越えてこれからの時代を創ってほしいと思っています。



## パネルディスカッション

司会:大場優次郎(法2)

(カッコ内は所属学部・学年)

白石 秀彰(法2) 慶應義塾大学は規模の大きい大学ですが学部間、キャンパス間の連携はどのように行われているのでしょうか。

西村 全学的な連携は大学評議会や大学教育委員会という組織を設けています。たとえばセメスター制やGPA、シラバス、eラーニングといった点について過去に議論をしました。また、メディアセンターでは全体的な集まりもありますが、キャンパスごとに迅速な判断や有意義な取り組みをしています。

たとえば授業評価については、SFCや三田の法務研究科でも早くから取り組んでいますが、他キャンパスや他学部で同じような仕組みを導入できるかという点、それぞれの体質にあった検討が必要です。他学部で独自に取り組んでいることはたくさんありますので、できる限り良いところを共有できるようにしていきたいと思います。

安西 慶應義塾は、他の総合大学に比べて多くのキャンパスをもっています。そして、キャンパスごとに教育の仕方、あるいは専門などに特徴があります。それらを全て平たくして一緒にしてしまうのがよいのか、むしろ多様性があつた方がよいのかは考えなければなりません。

そこで日吉キャンパスについてひとつ申し上げます。日吉キャンパスは各学部や分野を越えてコミュニケーションを取ることができる最高の場所だと思います。ですから、教員も学部ごとに分かれてはいますが、率先して開かれた教育の場を築いてほしい。もちろんその環境をつくるためには学生の支援が必須です。いろいろ難しい課題があるとは思いますが、日吉キャンパスにはこうした点に期待をしています。

羽田 私は経済学部で日吉主任を務めています。日吉主任は各学部に入らずついで、共通化していかなければいけない点や問題点について定期的に話しています。ですが、それ教育以外の案件もあり、残念ながら十分に教育に特化した議論を深めることができていません。

それ以外には、学習指導の先生方との連絡会議を設けています。ここでは日吉キャンパスの在るべき姿を、慶應義塾の150年記念事業に向けて実質的な議論をしています。

角倉 英充(文2) 大学には学生にとって使用意図が分からない施設がいくつかあります。これらについて学生がより利用しやすくするためには、今後どのような努力が求められると思いますか。

西村 研究プロジェクト専用のスペースなど学生にとって利用する機会が少ない部屋のことも含まれていると思いますが、一方で使用方法を模索中のスペースも一部あります。ですから、それらをどのように使いたいのか、ご提案いただければありがたいと思います。また、そうした意見を広くうかがう機会を設けていきたいと思っています。

北浦 紗絵里(文2) 語学教育について調べた結果、たとえば帰国子女でレベルに合った授業がないという意見がありました。そうした、少人数の学生の要望に対してはどのように考えていますか。

西村 たとえば、文学部の一年生でスペイン語のレベルが高いと判断できた場合には、三田キャンパスで行われる二年生の

授業を受けるのではなく、同じ日吉キャンパスで行われている商学部二年生のスペイン語のクラスに入っていたことがあります。こうした対応をしているケースは他にも見られますが、他学部の科目を卒業単位に数えることができるかどうかは難しいところです。

また、理想を言えば外国語教育センターなどが少数の要望を受け入れて学部を超えて自由に履修できるような授業を展開して頂ければ良いと思います。

若沢 佑典(文1) 先生方の中では教養についての議論がされていると思いますが、教養や教養教育についてどう捉えているのでしょうか。

西村 教養に対する考え方は先生ごとに異なると思いますが、私は教養とは、自分の考えを持つこと、それを相手に正確に伝え、実現していく力だと思います。

ですが、教養に関する考え方は多々ありますのでカリキュラムにどう反映するか、という点についてはすぐに結論を出せないと思います。

羽田 10年ほど前に文部省が大学設置基準の大綱化をしました。その結果、特に国立大学から教養部がなくなり、教養が消えてしまいかねない事態が起きました。ですが、最近になり教員の間で「最近の学生は教養がない」という意見があがり、教養をあらためて考える動きがでてきました。ですから、現在はまだ教養についての議論をしはじめたばかりなのです。私は、教養とは広く捉えると人間の生きてきた証のような部分、あるいは現在進行形でその人が体現しているものだと思います。

安西 なぜ古今東西の本を読まなければいけないのかというと、自分が直面する課題の解決方法の多くは、今までの歴史や文学の中にあるからです。在学中はもちろん卒業後も課題や悩みに直面するたびに、何かを決めたり、何か乗り越えていかなければなりません。その時に解決の糸口を探るきっかけをつくる力が教養ではないでしょうか。また、皆さんが理解されていることだと思いますが教養は、食べた分だけ体重が増えとか、そういうことではないと思います。

大場 優次郎(法2) ありがとうございます。それでは最後に安西塾長に日吉キャンパスで学生生活を送るにあたってアドバイスをいただきたいです。

安西 私が日吉キャンパスに通っていたころは、悩み通しでした。皆さんにも悩みはあると思いますが、後になってそれは人生の中の大切な一コマになります。また悩みや挫折は、後に糧になることが多いのです。ですから、その時々を精いっぱい過ごすことが一番大事なことです。



## アンケート結果報告

教養教育研究会において大学教育への提言や今後の研究活動の検討することを前提としたアンケートが実施されました。以下に回答の抜粋を掲載致します。

Q. 今後、取り上げてほしいテーマやフォーラムに呼んでほしい人について教えてください。

教養教育について：「教養」とは何か / 総合教育科目が存在する意義 / 日本の教養教育と（西洋）古典学  
 制度について：ゼミナール制度 / 留学制度 / 学部交流や国際交流などの既存の枠組みを超えたシステム作りの必要性 / 授業選択の際の情報量を増やす試み  
 インフラについて：ITC / インフラ設備間の連携  
 外国語教育について：大学の英語教育 / 特化された外国語教育  
 その他：福澤先生が生きていたら何を起こしたか / 慶應で演劇文化が育たない理由 / 課外活動のあり方 / 学生と地域 / 慶應の体育会 / 大学と企業の相違 / 学生が提案する慶應義塾 150 年についての企画  
 呼んでほしい人：全学部長 / 授業評価アンケートに反対する教授 / 慶應義塾職員 / 他大学の教職員や学生（海外含む） / 体育会の代表 / 社会で活躍する若手塾員 / 政治家

Q. このフォーラムの他に教員と学生の意見交換の場としてどのような場があったら良いと思いますか。

フォーマルな場：教員・学生・職員（学事やメディアセンター）が交じたパネルディスカッション / 学生から募集した大学の改革プランコンテスト / フォーラムを起点に普段から学生から職員に、教員から学生に声をかけてほしい / 対談形式のイベント  
 カジュアルな場：気軽に参加できる会 / パーティー形式の交流の場  
 その他：ウェブ上のコミュニティー / 生協で使われているような意見ボックス / 来往舎の活用

Q. 今回のフォーラムで得られたものはありますか。あればお書きください。

教員からの意見：レポートで「調べ、まとめ、考える」という作業が十分にできない学生が多いと感じていた。来年度からメディアセンターのライブラリーツアーを授業に取り入れたい / 学生がどのような考えを持っているのかを知ることができた。  
 学生からの意見：教職員の考えを知ることができた。 / 大学の理念が見えた気がした / 普段学生と接する機会のない方が、学生の考えを理解し改善に取り組んでいることがわかった / 真剣に大学の有り方について考え、熱く行動する人たちがいることを知った。

## 「学生フォーラム」を企画して

企画学生一同

今回のフォーラムは、「塾創立 150 年を迎えるにあたり、今後の大学教育の更なる発展を願い、学生の意見を直接大学に届ける場を設けさせていただこう」という学生の声の実現を願い創り上げたものです。このようなテーマの学生主体のフォーラムというのは、日吉キャンパスでは初の試みです。

フォーラムの日を迎えるまで、私たちの期待と不安、緊張感はいよいよ高まってきました。当日は、学生だけではなく、ご多忙でいらっしゃる安西祐一郎塾長、西村太良理事をはじめとする大学の教員の方々、職員の方々も積極的に参加して下さったことが印象に残っています。当日に行ったアンケートでも、学生と教職員の双方から「フォーラムを通じてお互いの考えを知ることができた」という意見が多くあがりました。さらには、「学生と大学側の意見交換をする場を今後も設けて欲しい」という積極的な意見も多数見受けられました。私たち学生主体と申しまして、このフォーラムの成功は、教養研究センターの方々をはじめとして、ご助力やご助言なしには考えられないものでした。また来場者の方々が労をいとわず足を運んでくださらなければ、そもそもフォーラムは成立しませんでした。この場を借りて改めて、フォーラムを開催するにあたってご支援くださった全ての方々に、お礼を述べさせていただきたいと思えます。

このフォーラムは、教養研究センター設置の実験授業スタディ・スキルズ（現アカデミック・スキルズ）の有志により企画されました。ひとりひとり外見はもちろん性格も違い、学部や将来の夢も多岐にわたっている個性的

な学生たちですが、授業で教養の大切さを学び、教室を離れても、いえ離れたからこそ、それを自分たちで実践したいという熱い思いはみな共有していました。今回それが学生フォーラムというかたちで結実したことは私たちにとっても大きな喜びです。このフォーラムが大学の教養教育のあり方について学生も積極的に提言していくことの橋頭堡になったのであれば、私たちの試みが持つ意義は、決して小さくないと思います。今後このフォーラムにとどまらず、学生と教職員に「教養する」ことについて語り合う文化が根付いていくことを、私たちは強く希望します。

慶應義塾は、真剣に大学のあり方、教養のあり方について考える場として機能する知的な場であって欲しい。今後も、多くの学生や職員の方々に参加していただき、一人ひとりが教養というもの、「教養する」ということについて改めて考えるきっかけとなるような場を創造していきたい。私たちはそのために、精一杯のことをしていきたいという思いを改めて強くしました。今回の私たちの活動が、大学が「教養する場」として発展していくことに少しでも寄与できたら幸いです。

慶應義塾大学教養研究センター Report No.11  
 交流・連携セクション(担当: 田上電也)

2006年3月31日発行  
 代表者 横山千晶  
 〒223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1

TEL: 045-563-1111 (代表)  
 lib-arts@hc.cc.keio.ac.jp  
 http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/